

森林文化アカデミーが目指人材育成

森と木に関わるエンジニア
とスペシャリストを育成する専門学校



GIFU ACADEMY OF FOREST SCIENCE AND CULTURE

岐阜県立森林文化アカデミー

川尻秀樹

岐阜県立森林文化アカデミーは

県立の専修学校 岐阜県民の税金で運営

専修学校 実践的な職業教育／専門的な技術教育

設立 平成13年度(2001年)

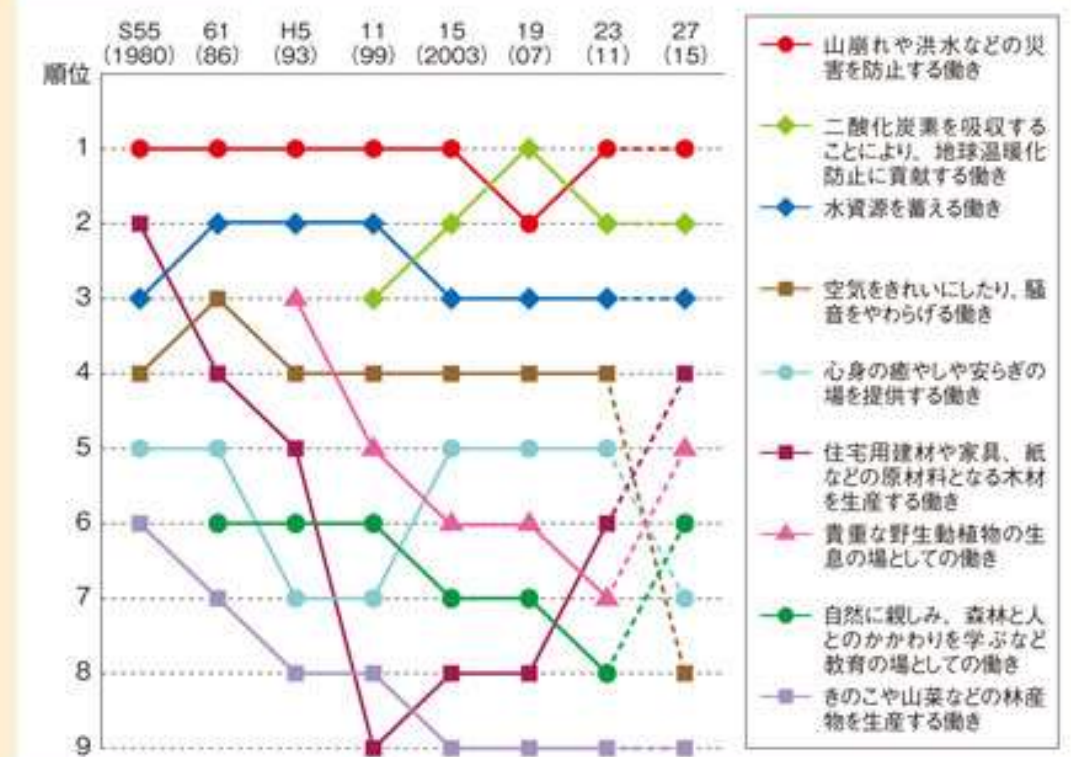
前身は、

昭和30年 緑化促進青年隊

昭和40年 林業青年研修所

昭和46年 日本初の林業短期大学校

資料Ⅱ-5 国民が森林に期待する役割の変遷



注1：回答は、選択肢の中から3つを選ぶ複数回答である。

注2：選択肢は、特にない、わからない、その他を除き記載している。

資料：総理府「森林・林業に関する世論調査」(昭和55(1980)年)、「みどりと木に関する世論調査」(昭和61(1986)年)、「森林とみどりに関する世論調査」(平成5(1993)年)、「森林と生活に関する世論調査」(平成11(1999)年)、内閣府「森林と生活に関する世論調査」(平成15(2003)年、平成19(2007)年、平成23(2011)年)、農林水産省「森林資源の循環利用に関する意識・意向調査」(平成27(2015)年10月)を基に林野庁で作成。

国民が森林に期待する役割の変遷 (平成28年発行、森林・林業白書より引用)

林業大学校等について

- 若手林業技術者の育成・確保のため、全国で林業大学校等が14校、府県により設置・運営されている。
- 特に、平成23年度以前は、全国に6校だったものが24年度に1校(京都)、平成26年度に1校(宮崎)、平成27年度に2校(秋田、高知)、28年度に4校(山形、福井、徳島、大分)が開校している
- 平成29年度には、3校(岩手、兵庫、和歌山)が開校するなど、近年、林業大学校等の数は増加している。

■ 林業大学校等の設立状況(平成29年4月現在)

年度		平成23年度以前	平成24年度開校	平成26年度開校	平成27年度開校	平成28年度開校	平成29年度開校
学校名	二年制	●群馬県立農林大学校 ●長野県林業大学校 ●岐阜県立森林文化アカデミー ●静岡県立農林大学校 島根県立農林大学校	京都府立林業大学校		秋田林業大学校	●山形県立農林大学校	●兵庫県立森林大学校
	一年制	公益財団法人熊本県林業従事者育成基金		みやざき林業青年アカデミー	高知県立林業学校・H30年4月から高知県立林業大学校に	とくしま林業アカデミー おおいた林業アカデミー ふくい林業カレッジ	いわて林業アカデミー 和歌山県農林大学校
累計		6校	7校	8校	10校	14校	17校

※ 山形県立農林大学校、和歌山県農林大学校については、既設の農業大学校にそれぞれ林業経営学科、林業研修課程を新設。
※ ●印は学校教育法に基づく専修学校
※ 奈良県(フォレスト・アカデミー)予定、三重県(みえ森林・林業アカデミー)予定、滋賀県など設置準備検討中

※ 林業大学校の定義は特に定まったものではなく、学校教育法に基づく専修学校や各種学校、県の研修機関として位置づけられているものであり、修学・研修期間は1～2年間となっている。

森林文化アカデミー組織図



●岐阜県森林研究所の職員も兼務辞令

主な施設

演習林 33 ha

校舎敷地 8.1 ha

森のコテージ

宿泊ゾーン

センターゾーン

森の体験ゾーン

森の情報センター

製材・木材開放試験室

テクニカルゾーン

アカデミーセンター

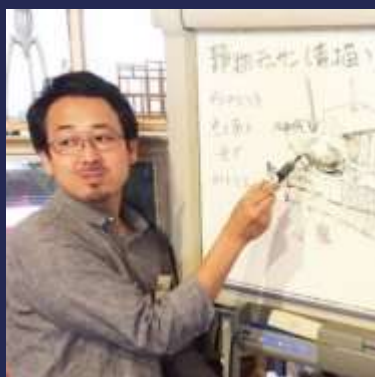
メディア棟(情報棟)

テクニカルセンター

個性的な教員たち



学長 涌井 史郎



他校にない多数の常勤教員、
経験豊富な客員教授・非常勤講
師から幅広いアドバイスを受ける
ことができます。

学校では主に学生と市民に学びを提供

専修教育部門 定員合計80名

森と木の
オープンカレッジ



エンジニア科(一般専修教育部門)

林業・林産業 20名 × 2学年

クリエイター科(高等専修教育部門)

林業・森林環境教育・木工
木造建築 20名 × 2学年

- 県民講座は週末
- 専門技術研修は平日

森と木のエンジニア科（後継者枠あり）

多様な森林・林業の現場において安全を確保しつつ、より経済性の高い生産を担うことができる技術者を育てることを目標に、①アドミッション・ポリシー（入学者の受入れに関する方針）、②カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施に関する方針）、③ディプロマ・ポリシー（卒業の認定に関する方針）に則った教育を行います。

アドミッション・ポリシー（入学者の受け入れに関する方針）

●現場技術者として林業・林産業を担うために必要な資質を有する入学者。

1. 林業・林産業の現場で働きたいという意欲を持つ人
2. 規則を遵守し、何事にも真摯に、かつ積極的に取り組める人
3. チームワークに必要な協調性を持つ人

森と木のクリエイター科（後継者枠あり）

体系的科学・技術を基礎とした、現場における指導的役割を担う人材を育てることを目標に、3つのポリシーに則った教育を行います。

アドミッション・ポリシー（入学者の受け入れに関する方針）

1. 自ら課題を発見し、その解決策を創造的に提案しようとする意欲のある人
2. 協調性を有し、周囲の人と円滑で正確な意思疎通が図れる人
3. 卒業後の職域において指導的な立場で仕事をしようとする、あるいは自ら起業しようとする意欲のある人

●【林業専攻】：自らが直接的あるいは間接的に林業に関わり、持続的な森林管理に貢献しようとする意志を持つ人

入学生に求めるもの

しっかりとした目標と意志を持った人で、卒業後に社会の一員として地域貢献を目指す人。

特に、過去の成功体験に頼ることなく、常に改革を進めるため、強力なエネルギーを持つ「若者」、旧来の価値観の枠組みからはみ出た「バカ者」、組織の外にいて従来の仕組みを批判的に見ることができる「よそ者」を育てることも重要。

幸いにも本校には多彩な前職を持つ人材が数多く在籍し、経験豊かな人材を再教育することで、地方創生につながる人材を育てることができると信じている。

給付金など

森と木のエンジニア科

大垣共立銀行奨学金	年額10万8千円
十六銀行奨学金	年額10万8千円
岐阜信用金庫奨学金	年額10万8千円
美谷添奨学金	年額10万円

森と木のクリエイター科

特別給費生奨学金	年額56万円
美谷添奨学金	年額10万5千円

緑の青年就業準備給付金

将来、林業分野（森林組合、林業事業体、製材工場、木製品製造業など）へ就業し、中核を担うことに強い意志を持っている人が対象

年額 上限150万円 最大2年間

エンジニア科

一般専修教育部門



現場から日本の森を元気に！
自ら考え、行動できる現場人

・林業・林産業の多様な現場において、安全を確保しつつ、より経済性の高い生産を担う技術者

・森林の将来像をイメージしながら、森林を適切な状態に管理・育成できる現場技術者

・国産材の特性を活かした提案ができ、また、川上・川下双方に配慮した木材の流通販売を担える技術者



学びの特色 エンジニア科

『人』・『場』・『モノ』を活かした現地現物主義

●豊富な実習で学ぶ



●実践フィールド「演習林」で学ぶ



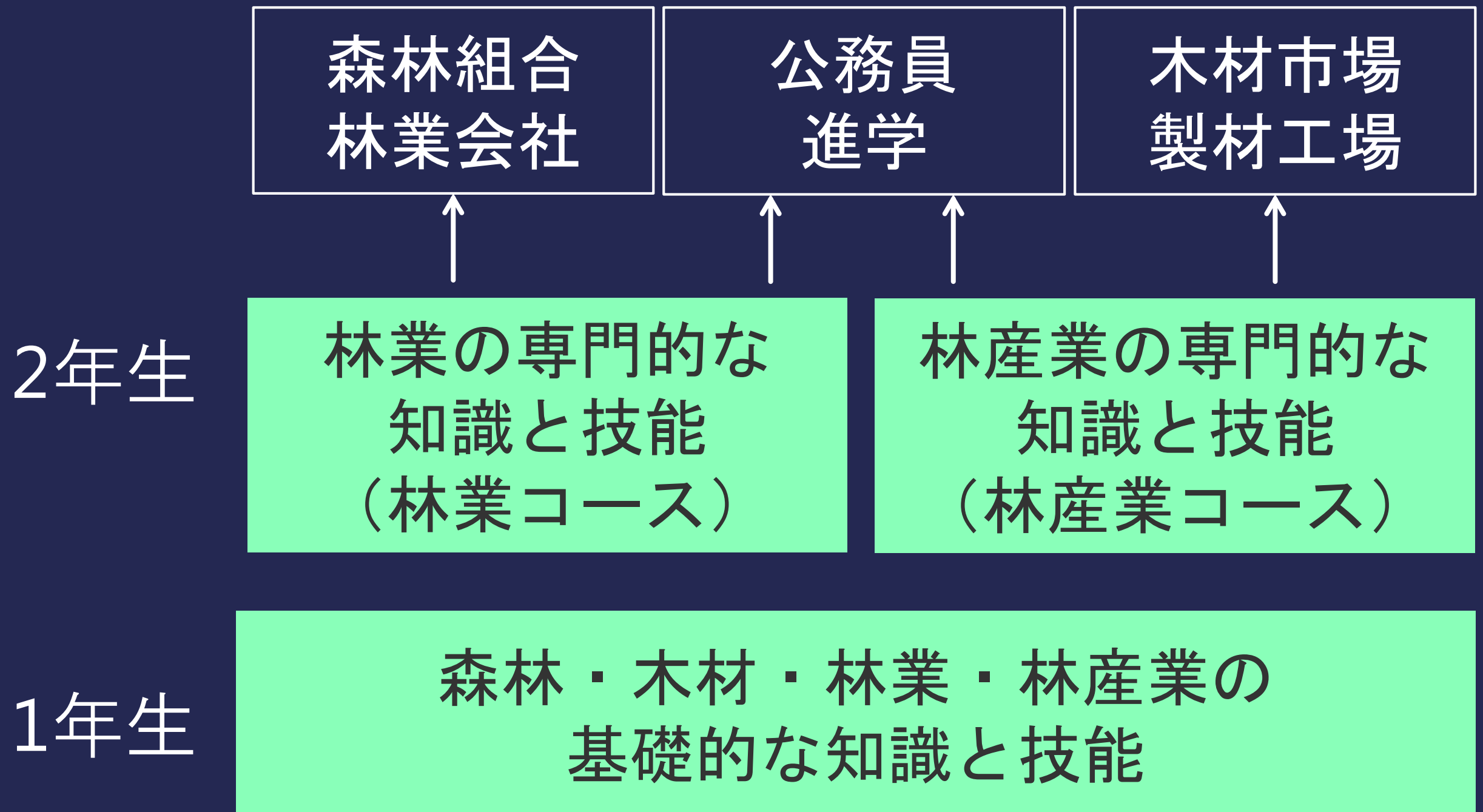
●多様な設備・機械を活用して学ぶ



●多分野の教員から学ぶ



2年間の学びと進路



クリエイター科 高等専修教育部門

体系的科学・技術を基礎として、現場における指導的役割を担う人材

専門性が高く、職能として社会的対価が得られる人材

=プロフェッショナル の育成を目指しています



森林利活用分野
(林業・森林環境教育)



木材利用分野
(木造建築・木工)



環境教育・木造建築・木工の学生も林業・林産業体験 (植林からチェーンソー・刈払い機の特別教育、製材までを体験)



学びの特色

森林利活用分野



地域林業発展のための
洞察力、創造力、企画力
を磨く

多様な現場に対応できる
現場力を身に付ける



森林空間の活用と
森を伝えるための技術や
感覚を鍛える

学びの特色 木材利用分野



ものづくりの仕事は暮らしの提案、
暮らしの提案力を身に付ける

実際に作ることで、学外の専門家に交じり、緊張感の中で、**実践**から
学びを得る



地域材での商品開発、技術開発

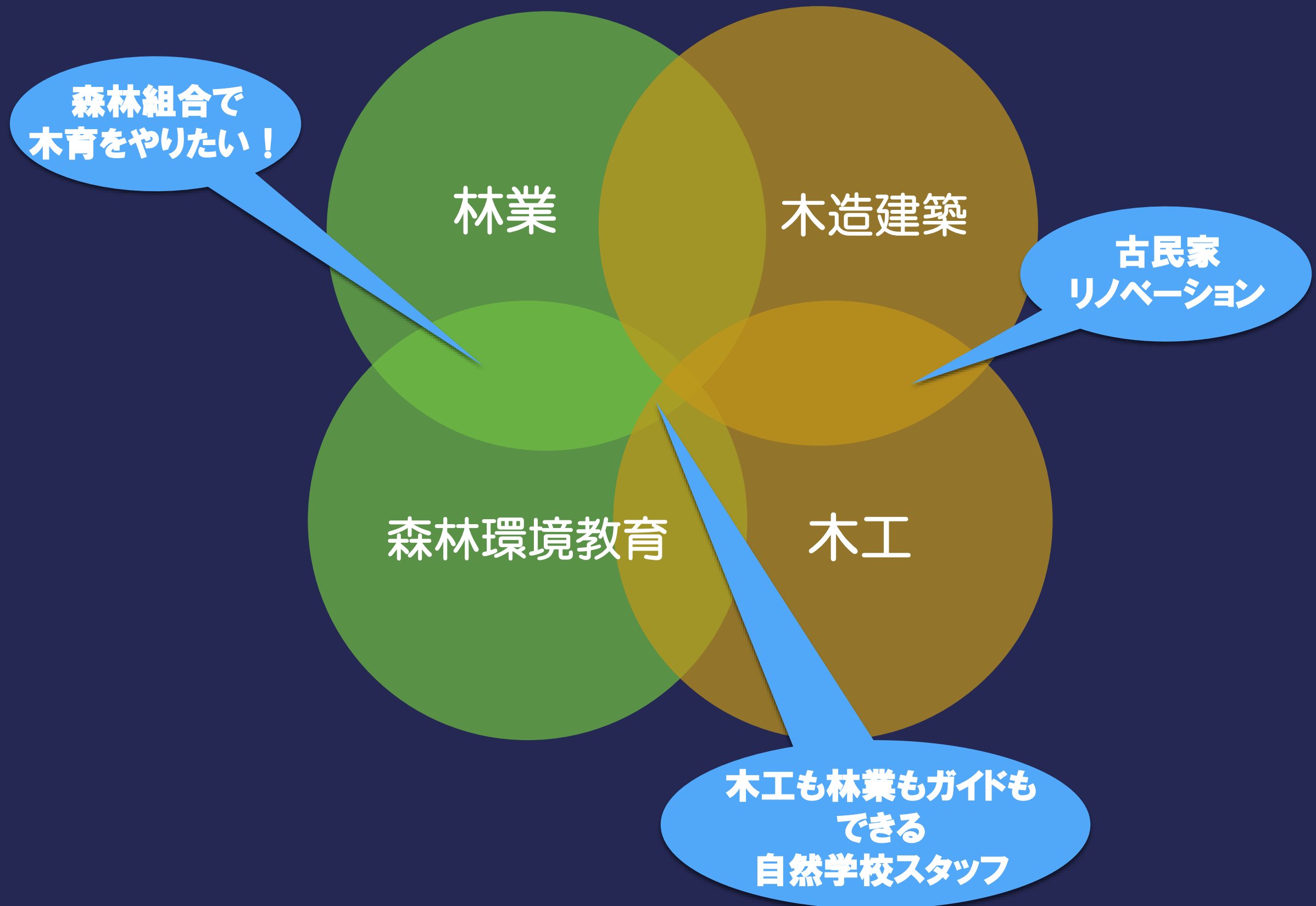
自力建設プロジェクト



木造建築専攻の学生
が棟梁となり、地拵・
基礎打・刻み・建屋の
すべてを毎年体験



実際には・・・



全国から集まる学生29・30年度

- 18歳～59歳まで、いろいろな世代の学生と一緒に学んでいます。
- 出身は岐阜県や東海圏に限らず、全国各地から集まってきました

<H29・30入学・年代別構成>

年代	エンジニア科			クリエイター科		
	男	女	計	男	女	計
10代	3	2	4	3	6	
20代	4	1	5	1	2	4
30代	2		2	7	6	1
40代				1	3	4
50代				4	2	6
60代						
計	3	8	5	4	3	2

H29・30年度入学者平均年齢
エンジニア科 19.1歳
クリエイター科 35歳(23歳～59歳)

クリエイター科の前職は様々、大学生やIT関係、公務員だった人もいます

<H29・30入学・出身地別人数>

都道府県	エンジニア	クリエイター	計
宮城県	1	2	3
茨城県	1	1	2
埼玉県		3	3
千葉県		2	2
東京都	1	3	4
神奈川県	1		1
富山県	1		1
石川県		1	1
福井県		1	1
山梨県	1		1
長野県	2	1	3
岐阜県	28	10	38
静岡県	2	1	3
愛知県	2	7	9
三重県		1	1
京都府		1	1
大阪府	1	4	5
兵庫県	1		1
鳥取県		1	1
福岡県	1		1
合計	43	39	82

森と木のオープンカレッジ

市民向けに、主に週末に開催しています
だれでも受講できる**一般**向け講座に加え、**専門技術者**向けの研修も行っています



県民向け生涯学習・指導者養成



林業技術者
向け



地域森林監理士
施業プランナー
高性能林業機械など

専門技術者研修

木材建築の構造性能
許容応力度計算
木造建築病理学など



木造建築
技術者向け

海外連携

■平成26年11月にロッテンブルク林業単科大学(HFR)との間で教育・人材育成等の連携覚書を締結。

■教員や学生の交流が始まっています。

□平成27年度

- ・教育方法の調査に教員3名を派遣、HFR学生1名2ヵ月受入れ

□平成28年度

- ・ドイツ林業調査へ学生2名＋教員1名派遣
- ・HFRサマーセミナー参加(学生3名＋教員1名)
- ・HFR教員(建築系・森林GIS・環境教育)3名招聘・講義

□平成29年度

- ・HFR学生1名8～9月研修受入れ
- ・HFRサマーセミナー参加(学生1名＋教員1名)
- ・ドイツ森林環境教育視察研修(学生6名＋教員1名)
- ・HFRカイザー学長以下、教授4名招聘
- ・ドイツ環境教育施設の建築設計調査など(教員2名＋職員4名) 2回



自治体との連携事業

・美濃市との連携協定

道の駅にわか茶屋建設、古民家改修、森林整備
ウッドスタート事業、おもちゃ開発
プレーパーク、森のようちえん

・美濃加茂市との連携協定

アベマキの学校机プロジェクト、森のようちえん

・揖斐川町との連携協定

教員駐在、森のようちえん、森のこうみんかん

・豊田市・豊田市森林組合との連携協定

森林組合森林技術者の再教育

アベマキ学校机プロジェクト ウッドデザイン賞2015で林野庁長官賞 毎年実施で持続的な里山整備と地元里山での思いをつなぐ環境教育を実現

①伐採 5年



②製材・乾燥・製造 (天板製造見学・体験: 6年生)



小学校の環境教育と連携

循環

③天板は翌年入学する新1年生へ



⑤天板とともに卒業 (天板は傷や落書きをそのままに卒業証書入れ、ペンなどに加工)



④ 6年間使用



地域が抱える森林・林業の問題を、地域の人々とともに取り組み、解決をはかる「地方自治型自由学校」

自然と人との新しい関係を追求しながら、持続可能な循環型社会の創造に森林の視座から寄与できる人材育成する。

1. 業界団体の現状・県の実情に即し、現地現物主義を基本に、実践的人材育成を目指す。
2. 地域に根差した活動を通して、教職員と学生全体で社会に貢献する。
3. 税金だけの運営に頼るのではなく、積極的に外部資金の獲得を目指す。
4. 専修教育だけでなく、行政・専門技術者・一般県民に広く学びと研鑽の場を提供する。

仮称 森林総合教育センター — 平成31年開所、平成32年本格始動



このセンターは、100年先の森づくりを見据え、森林に対して責任ある行動ができる人材づくりを目指し、幼児から大人まで幅広い世代が自然を理解し、活用すること(ぎふ木育)を浸透させるための実践教育・研究施設です。

◆ネイティブアメリカン(アメリカインディアン)の考え

母なる地球のために、そしてそこに住むすべての生き物と、七代先までの子供たちのために

●Iroquois Tribeニューヨーク州フェニシア、Hopi Tribeアリゾナ州コロラド川沿い

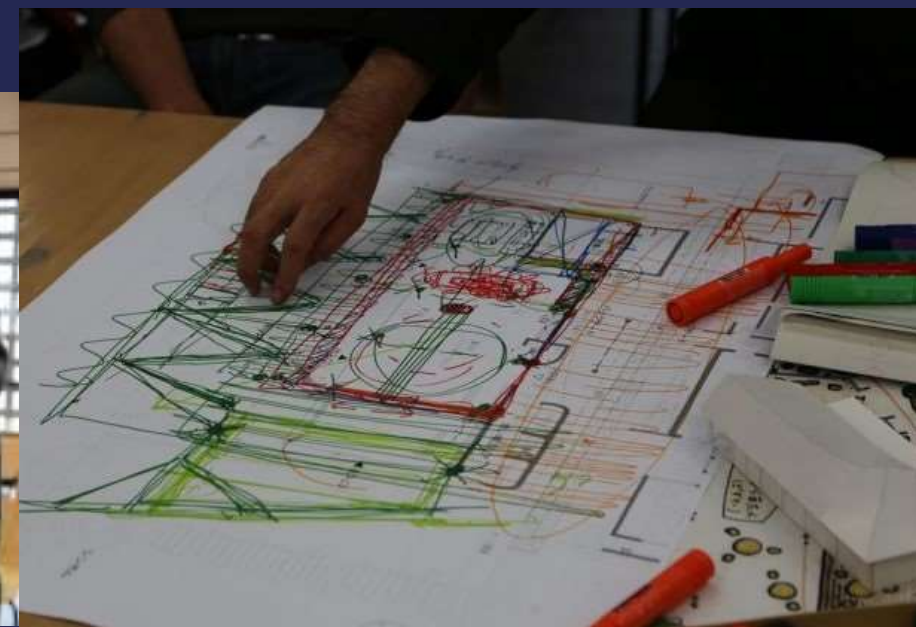
アメリカインディアンは物事を決定し行動するとき、七代先の子孫のためになるかどうかを考えるのだという。

七代先のいのちを考え、自然や人々に対する尊敬と感謝に根づいた考えをしたならば、今大切にすべきものは何であるか。

建物は学生が設計、建築家 隈研吾先生監修



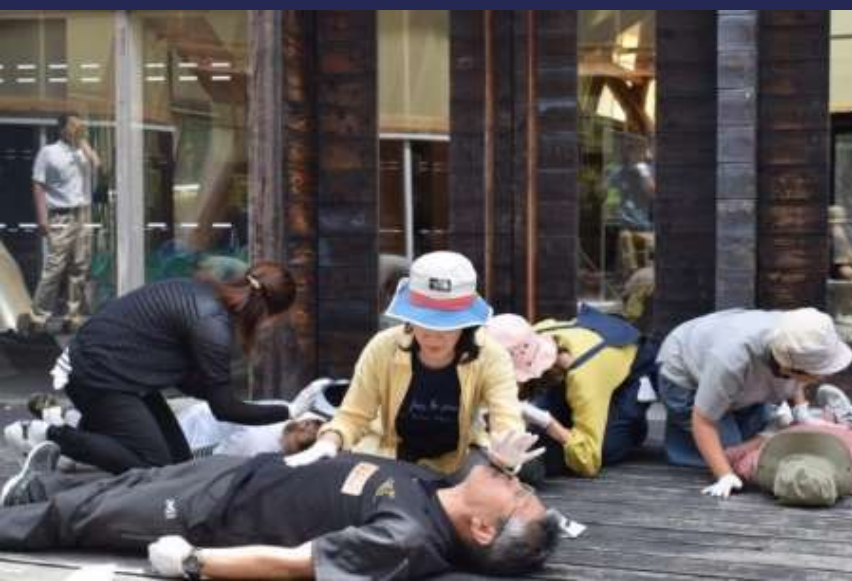
木造建築専攻の学生が環境教育系の学生の意見も取り入れながら
設計案を考え、それに隈研吾先生や涌井学長がアドバイスする







大人も自然の中では変化できる





ソフト面では

委員には（公社）日本環境教育フォーラム理事長の川嶋 直さん、株式会社ホールアース代表取締役兼NPO法人ホールアース研究所副代表の広瀬麗子さん、トヨタ白川郷自然学校校長の山田俊行さん、岐阜県木の国・山の国県民会議委員の伊藤栄一さんを迎え、

- 楽しむこと
- 実情に合わせて常に変化できる組織であること
- すべての人たちが森の楽しさを実感できる施設
- 森のファンづくり、マーケットづくり



◎今までになかった組織で、かつ変化できる仕組みづくり。